※発言をそのまま書き起こしたデータを基に、個人情報に関する部分を削除し、文意が通るように修正を行っています。

開会挨拶

木村　浩　氏（NPO 法人パブリック・アウトリーチ／研究代表者）

（司会）　皆様、今日は台風の中お集まりいただき、ありがとうございます。それでは、平成 25 年度原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ課題「『原子力ムラ』の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」のシンポジウムを始めます。司会は、NPO 法人パブリック・アウトリーチの神崎が務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

今日のシンポジウムのテーマは、「『原子力ムラ』の境界を越えるためにはどうしたら良いか？　～市民と専門家がお互いを認め合うためには・・・　『フォーラム』という取り組みに関する成果報告～」となっております。

はじめに、資料の確認をいたします。A3 を二つ折りにしたものの中に、発表資料が 4 種類ございます。その後ろに、皆様にご記入いただくアンケートがございます。最後に、A4 の半分の大きさの、青い縁取りのある質問用紙がはさんであります。資料に不備がある場合は、受付にお申し出下さい。

続いて、本日のプログラムをご説明いたします。

この後、開会の挨拶に続いて、研究代表者である木村浩から、研究の趣旨説明をさせていただきます。

13 時 20 分からは、関西大学、土田昭司先生から、社会調査の実施とフォーラム参加者の決定についてお話しいたします。

13 時 40 分からは、実際に行なったフォーラムの実施状況を、竹中一真さん、鬼沢良子さん両氏にお話しいただきます。

お手元の資料は、ここまでの 4 件の発表に関するものになります。

続いて、フォーラムに参加された首都圏住民の方、日本原子力学会員の方にご登壇いただき、参加者としてのコメントをご発表いただきます。

ここまでの発表に関して、皆様が抱かれた質問やコメント、また、休憩をはさんだ後に行なわれるパネルディスカッションでお聞きになりたいことなどを、お配りした質問用紙にお書き下さい。スタッフが質問用紙を集めた後、20 分の休憩時間を設けます。

休憩の後、予定では 15 時からですが、東京大学公共政策大学院、谷口武俊先生から、この研究に対するコメントをお聞かせいただきます。

引き続きまして、休憩時間に集めた質問やコメント、お聞きになりたいことなどについ

て、檀上の発表者からそれぞれ回答していただきます。1 時間を予定しておりますが、時間が余るようでしたら、会場からの質問もお受けしたいと思います。

最後に、次年度に向けての課題と抱負を、研究代表者の木村浩から述べさせていただきます。16 時 30 分に終了する予定です。

皆様にお配りしたアンケートは、お帰りの際、受付のスタッフにお渡し下さい。

それでは、開会挨拶と、それに引き続いて、研究の趣旨説明を、NPO 法人パブリック・アウトリーチ、研究総括、木村浩から申し上げます。

（木村）　皆さん、こんにちは。本日は、台風が直撃し、足下の悪い中お越しいただいて、まことにありがとうございます。

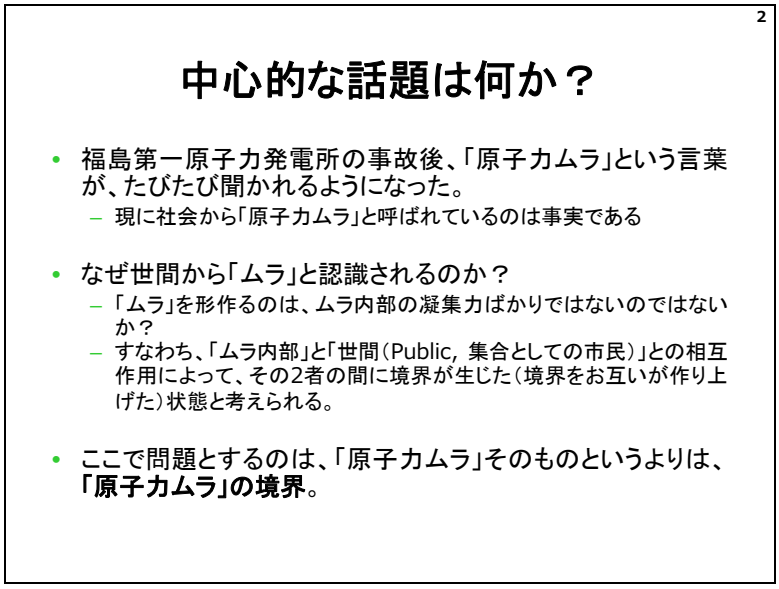
私は、NPO 法人パブリック・アウトリーチの木村と申します。「『原子力ムラ』の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」という研究の研究代表者を務めております。

昨年の 10 月からこの研究が始まりまして、約 1 年が経過いたしました。その中で、社会調査を実施し、そして、それに基づいて「フォーラム」という取り組みを実施をしたということになります。本日は、そのフォーラムについて、どのように行なわれたのかということをご紹介するシンポジウムになります。

このシンポジウムは 13 時から始まって、16 時半までとなっておりますが、実はこれは「フォーラム」の開催時間と一致させています。時間感覚も共有できればと思って、この時間帯にしました。3 時間半ということで、長丁場ではありますけれども、最後までお付き合いいただければと思います。それでは、今日 1 日、よろしくお願いいたします。

研究の趣旨説明

（木村）　続いて、どのような背景でこの研究を始めたのかということをご説明したいと思います。



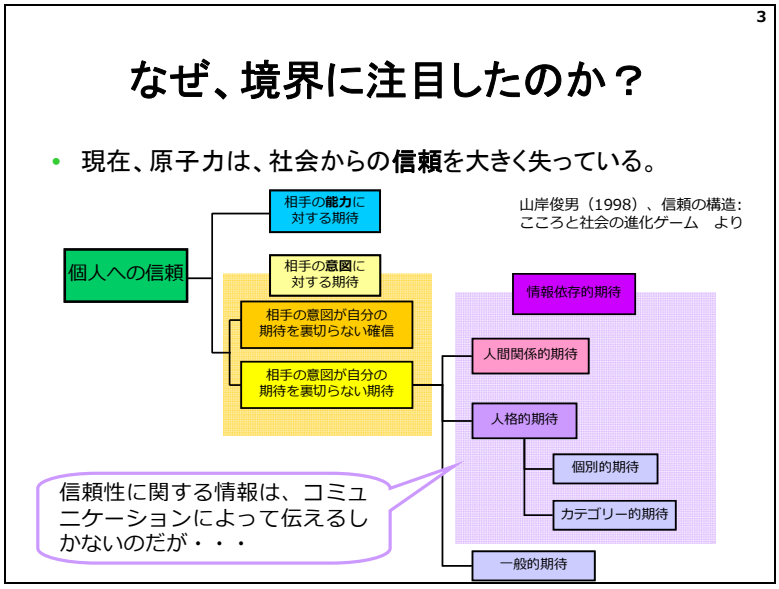
まず、この研究の中心的な話題は何なのか、ということです。

福島第一原子力発電所の事故の後、「原子力ムラ」という言葉がたびたび聞かれるようになりました。現に、社会から「原子力ムラ」と呼ばれているという事実があります。この後、土田先生の発表でも出てくると思いますけれども、現在、原子力というものがかなり信頼を落としている。そういう状況を象徴するように、「原子力ムラ」という言葉が使われているのではないか。ということで、「原子力ムラ」にフォーカスを当てて、研究を始めようというのが、第一歩でした。

次に、なぜ世間から「ムラ」と認識されるのか、ということを考えていきました。いわゆる組織の話であるとか、原子力に携わる方々がどのような組織構造で、どうやってつながっているのか、というような話も重要なポイントではあるのですが、この研究では、「ムラ」を形作るのは、ムラの内部の凝集力だけではないのではないか？　と考えました。すなわち、「ムラ内部」と「外（世間）」との相互作用によって、2 者の間に境界が生じた状態ではないか。原子力ムラの内部の人たちが凝集するだけではなくて、むしろ、外から中がどう見えるのか、中から外がどう見えるのかということで、その間のギャップが、その敷居をどんどん高くしていって、より「ムラ」というものを強固にしてしまったのではないか、と考えました。

この仮説に基づいて、研究を進めています。敷居というところに特に注目して、それを「原子力ムラの境界」と名づけています。したがって、研究プログラムの名前は、「『原子

力ムラ』を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」ではなくて、「『原子力ムラ』の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」となっております。中と外との相互作用によってできあがった敷居をどうにかしたい、ということが研究の焦点であるということです。



さて、先ほどもお話ししましたけれども、現在、原子力は社会から信頼を大きく失っているということが、様々な社会調査からも観測されています。

この図は、山岸俊男氏が「信頼の構造」という本の中で挙げている信頼のモデルになります。これは人対人の場合ですけれども、信頼というものは、「能力に対する期待」と、「意図に対する期待」の 2 つによって作られるといわれています。

人々は、どうやって自分の中でその「期待」を推し測っていくのか。そのためには、外からの情報が必要になってきます。「情報依存的期待」と書いてありますけれども、A さんが、B さんを信頼できるかどうかということを考えるときに、A さんと B さんの関係がどうであって、A さんの中に B さんの情報がどう伝わっていくのかということが、まさにここに示されています。

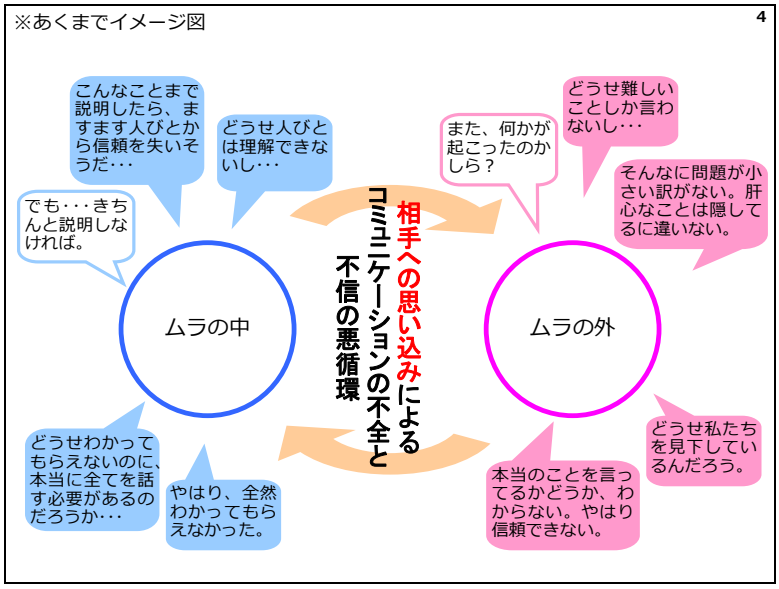
「人間関係的期待」というのは、フェイストゥフェイスのコミュニケーションによって、A さんが、「ああ、B さんはこういう人なんだな」ということが分かる、というものになります。

「人格的期待」というのは、間に誰かが入ることで伝わる情報です。C さんが B さんの噂をしていたのを A さんが聞いた。あるいは、あの人はマスメディアでこう報道されている。そういうことによって伝わる部分になります。

このように、A さんが B さんの情報を受け止めることによって、B さんを信頼できるかどうかということを見積もることができる。そういうことを山岸先生はモデルにしていま

す。

今、「信頼」が大きく損なわれているので、例えば「ムラ」の人たちが頑張っていても、その頑張りが周りの人に伝わらなければ、信頼は回復していきません。頑張っていることは、やはり何らかのコミュニケーションによって伝えるしかないのですけれども、そのコミュニケーションというところに、実は、大きな問題が起こっているのではないかということです。



これはあくまでイメージ図で、分かりやすく説明するためにモデル的に書いたものなのですけれども、例えば、ムラがあるとして、ムラの中の人と外の人がコミュニケーションをしようとします。

そのときに、ムラの中の人は、「きちんと説明しなければいけないな」と思って、いろいろと説明しようとするのですけれども、「こんなことまで説明したら、ますます人々から信頼を失いそうだ」とか、「どうせ人々は理解できないだろうな」というように、情報を伝える相手のことを勝手に推測して、「説明しなければ。だけど…うーん…」と思って、少しコミュニケーションが雑になっていくのかもしれない。

一方で、ムラの外の人は、「何か言おうとしているけれども、また何か起こったのかな？」と考える。しかし、「どうせ難しいことしか言わないし」「肝心なことは隠しているに違いない」「本当のことを言っているかどうか分からない。やはり信頼できない」というような思いがあって、情報が伝わってきているのだけど、その情報自体を信頼しきれない。そして、それを出している元も信頼できないので、その情報は信頼できない。

そういうことがグルグルと回って、ムラの中の人たちが「やはり全然分かってもらえなかった」「どうせ分かってもらえないのに、本当に全てを話す必要があるのだろうか」と思ってしまう。

これは単純化したモデルで、ある一面しか表していないですけれども、例えばこういうことが起こってしまうと、勝手に自分の中で作った「相手への思い込み」がコミュニケーションの不全を引き起こし、コミュニケーションの不全があるからこそ、より不信感が増していく。そういうコミュニケーションの不全と不信の悪循環が起こっている可能性があるのではないかということを、我々は危惧したわけです。

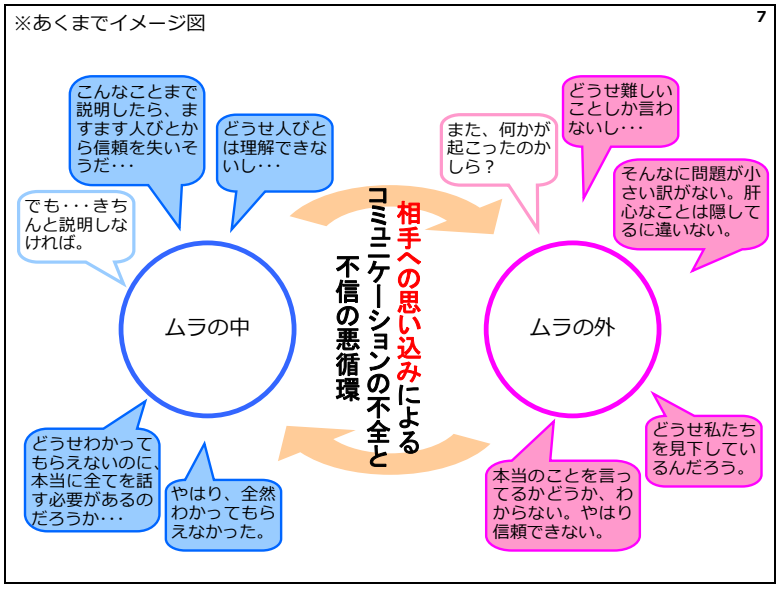
お互いが何らかの思い込みをして、お互いのギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないか。そして、「原子力ムラ」という言葉は、相手への思い込みを顕著に表している言葉かもしれない。

ということで、「原子力ムラ」という言葉に注目し、中と外との思い込みによるギャップを「原子力ムラの境界」と定義して、この境界をどうやって越えるかということを、この研究で取り組むということになります。

では、その境界を取り除いていくためにどうしたらいいのか。

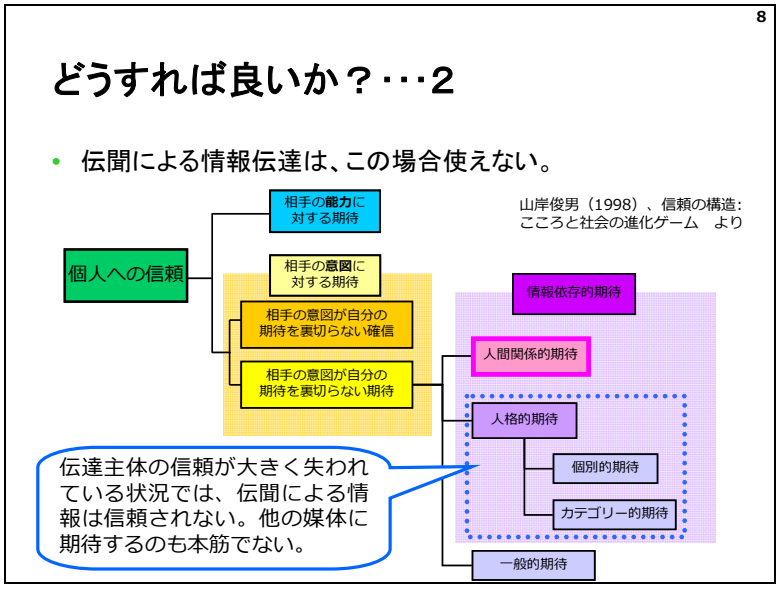
まず、お互いの思い込みが強まっていく構造を止めることが第一歩ではないか。信頼を構築するというのはかなり先の目標であって、その前に、どうやって思い込みが起こっている状況を打破するのか。そのための構造をどうやって作るかということが、研究の大きな方向性になります。

そのひとつの解として、お互いのイメージが、必ずしも全部（全員）に当てはまるわけではない、ということを知ることが、思い込みを止めることにつながるのではないか、と考えました。



これは先ほどの図ですけれども、この中で、太線で縁取られた吹き出しは、相手を「こういうものなのだろう」と思い込んでいる部分になります。その結果としてコミュニケー

ションが不全になる。こういう思い込みに当てはまる人も、確かに両者にいるけれども、それは必ずしも全員ではない。ということは、全体を一様に捉えてしまうのは、あまりよくないのではないか。そういうことを認識できるような仕掛けを作る必要があるのではないか、と思ったわけです。



ただ、先ほども言いましたけれども、信頼がかなり低下していて、コミュニケーションの不全が起こっているとすると、特に伝聞というものはコントロールしにくくなる性質がありますので、使うわけにはいかない。

そうすると、やはり「人間関係的期待」と書いてある部分に期待をして、直接にコミュニケーションをするフィールドを作る必要があるのではないか、と考えました。

お互いが直接にコミュニケーションを取って、お互いの思い込みを打破するような仕組みを備えたフィールドを作ろう。それを「フォーラム」と名づけました。

では、お互いの思い込みを打破するためにはどうしたらいいのか。市民と専門家が、お互いに尊重することを可能とする仕組みが必要になります。この「尊重」をひとつのポイントにして、フォーラムの枠組みを作っていきました。

「尊重」という概念は難しいのですけれども、ある意味では、「自分とは異なる考え方も、その人にとっての真実なんだ」ということを、お互いに認識できるような関係。これが「尊重できる」という関係なのだろうと考えました。

それを達成するためにどういうところに気を配ったかというと、1 つ目は、参加者が公平だと思えるような場作りをするということです。

2 つ目は、冷静な話し合いを導く、あるいは、その場を客観的に捉えることができるよう

なコミュニケーションのフィールドを作るということです。

参加者が公平だと思える場作りに関しては、そのために社会調査を実施し、それに基づいて参加者を選択しました。こちらについては、土田先生から詳しくお話をいただきます。冷静な話し合いを導き、その場を客観的に捉えることについては、竹中さんと鬼沢さんからご紹介いただくということになります。

12

フォーラムの設計

- 観察者（研究）の目的設定
  - 市民と専門家が、お互いに尊重することを可能とする仕組みを創りだす。
- フォーラムの目的設定
  - どうしたら、市民と専門家がお互いに尊重し、「原子カムラ」の境界を越えることができるか、を見出す。
- テーマ・専門家ネットワーク
  - 情報「提供」の場ではないので、いわゆる講義はしない。
- 参加者の募集、決定
  - 社会調査の実施と同時に参加者を募集※。市民参加者、専門家参加者それぞれ10名程度。社会調査結果に基づいて参加者を決定
  - 市民参加者：性別・年齢・原子力利用に関する項目
  - 専門家参加者：（性別・）年齢・専門領域

※市民参加者については、追加募集を行った。

- フォーラムの内容、段取りの決定
  - 全5回を開催。隔週土曜日13時～16時半（原則）。
  - 初回は「原子カムラ」について話し合う。その後は、参加者の意思によって柔軟にテーマを変更する。
  - 「グループワーク」を中心として、「オープンエンド」の議論を展開する。
  - 個人が特定できないように注意し、話し合いの内容は全公開する。

以上のようなことを踏まえて、フォーラムを設計していきました。こちらに示したのは、設計の段取りになります。

まず、「観察者の目的設定」は、我々の目的設定になります。市民と専門家がお互いに尊重することを可能とする仕組みを創りだすということを目的にしています。

フォーラムの参加者にも、同じ目的を共有してもらうことにしました。どうしたら、市民と専門家がお互いに尊重し、「原子力ムラ」の境界を越えることができるか、ということを見出すために、フォーラムに参加してくださいとお願いをしているということです。

「参加者の募集、決定」については、詳しくは土田先生からお話がありますけれども、簡単に言いますと、社会調査を実施し、同時に参加者を募集しました。その中から、市民参加者、専門家参加者をそれぞれ 10 名程度ずつ決定しまして、フォーラムに参加していただきました。

「フォーラムの内容、段取り」に関しては、フォーラムは 5 月末から 7 月末まで、全 5 回、隔週の土曜日に実施しております。時間は、先ほど言いましたけれども、基本的には 13 時から 16 時半までになっております。初回だけは 17 時までででした。内容としては、グループワークを中心にした、オープンエンドの議論を展開するということで、市民と専門家が対等に議論できるような話題、そして雰囲気にも工夫をしてまいりました。また、個人が特定できないように注意して、話し合いの内容はホームページに全て公開するという

ことで、公平性を確保するべく努力をしております。

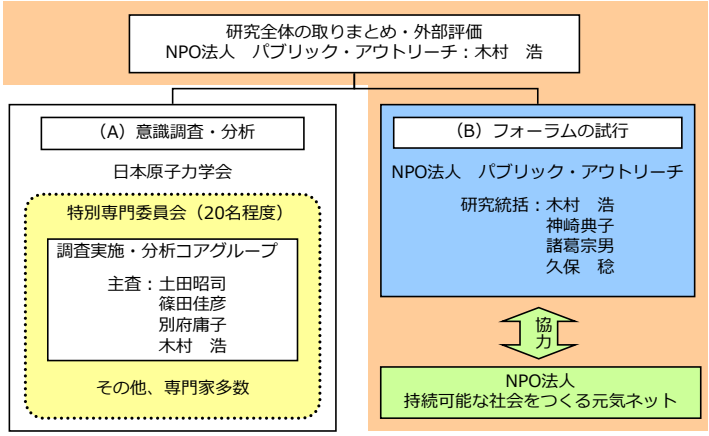
13

- 第1回:2013年5月25日(土)13:00～17:00
  実施内容:「『原子カムラ』とはなんだろうか？」
- 第2回:2013年6月8日(土)13:00～16:30
  実施内容:「なぜ、原子カムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？」
- 第3回:2013年6月22日(土)13:00～16:30
  実施内容:「原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？　無関心は本当にダメなのか？「原子力への関心」とはそもそも何なのか？」
- 第4回:2013年7月6日(土)13:00～16:30
  実施内容:「原子力は本当に安全か？　原子力は本当に必要か？原子力はやめることができるのか？　エネルギーの中の原子力の位置づけは？」
- 第5回:2013年7月20日(土)13:00～16:30
  実施内容:「もう一度考えよう･･･「原子カムラ」はあるのか、ないのか、何なのか？「原子カムラ」というものをどうしたらよいか？」

こちらは、第 1 回から第 5 回までの内容をまとめたものです。これについては、竹中さんから詳しくお話があると思います。

14

研究の実施体制



最後に、研究の実施体制をお示ししました。

私、木村が全体の統括をしております。

左側は、日本原子力学会さんにご協力をいただき、その中で土田先生に主査をしていただいて、社会調査、また、フォーラム参加者の調査を中心にやっていただくことになります。

右側は、パブリック・アウトリーチが中心になって、NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネットさんにご協力いただき、フォーラムを設計し、実際に実施する。

このような形で研究を実施してまいりました。

ということで、私の発表はここまでとしまして、ここから先は、具体的にどういうことをやったのか、土田先生、竹中さん、そして鬼沢さんからお話をいただきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

（司会）　木村さん、どうもありがとうございました。